

## 論 文

## 典故私論(上)

## Views on Classical Allusion (Part 1)

川 口 喜 治

Yoshiharu KAWAGUCHI

対句と並ぶ中国古典文学の修辞技法である「典故」については、すでに前野直彬氏によって簡潔明解に論じられている<sup>(1)</sup>。それを承知でいまさら典故について私見を述べることは、屋上屋を架すが如き無意味な試みかもしれない。ただ論者が中国古典詩を読解してきた中で自分なりの気付きもあったと思われ、それを備忘のために断章的に書き留めておくことにした。それ故、本論では節ごとの論理的関係が必ずしも明確ではないことをはじめにお断わりしておく。

## 1. 基礎概念

## 1-1. 典故の定義

いったい文章(散文・韻文)を書くことにおいて二つの大きな要素が前提としてある。一つは内容であり、一つは修辞である。文章を書くに際し「何を書くか」が定まっていなければ書き出すことさえできないであろうし、たとえ定まっていたとしても拙論の如く読むに値しない内容であれば一顧だにされないのである。次にもし内容が読むに値する場合、それを「如何に書くか」によって、作者が読者<sup>(2)</sup>に「期待すること」が期待通りなのかそれ以下なのか場合によってはそれ以上なのか決定される。ここで作者が読者に期待することとは作者の意図の伝達や読者の感動がまず考え得る。ただし意図の伝達は正確を求めている場合だけではなく晦渋な表現による自己韜晦もあり得るし、読者の感動も喜怒哀楽の共感・共有だけではなく、作品に対する嫌悪・忌避も想定しうるであろう。

さて上記の二大要素のうちの修辞に関して、中国古典文学において代表的な技法にあたるのが対句と典故であり、本論はもっぱら後者について綴られてゆくことになる。

まず典故という修辞技法の定義について確認しておく。

周知の通り、劉勰『文心雕龍』事類第三十八は「事類者、蓋文章之外、據事以類義、援古以證今者也。(典故とは、文学の創作に際して、外面からあることがらを持ち来たって、その概念を類型化し、古えを借りて現実を説き明かす技法である。)<sup>(3)</sup>」と「事類(典故の運用)」を「引証の典籍による権威づけ、事類の効用的側面」<sup>(4)</sup>という視座から定義する。そして「その失敗例」<sup>(5)</sup>を中心にいくつかの用例を引いて論を展開し、最後に「經籍深富、辭理遐互。皓如江海、鬱若崑鄧。文梓共採、瓊珠交贈。用人若己、古來無懵。(古典の世界は広く豊かに、論理は無限の可能を宿す。さながらに涯しなき大河や海、緑したたる仙山や森。良材は切り出され、美玉はこもごも人手に渡る。古人の言を自在に活かせば、時間の霧も晴れあがる。)」と「贊(要約)」する。

このように、典故はその運用を「成功」させれば、その詩文を广大で深遠な古典の世界を包含する価値多きものとする事ができると認識されていたことが確認できよう。

次に前掲前野氏に依拠し、典故についての現代的な説明をしておく。

典故はその作品が書かれた以前の特に古典と認定された書物に見える言葉や歴史上の事実(=故事)を作品に読み込み、作品の世界を豊かにする技法である。換言すれば、あることの表現において、古典のイメージや史実とだぶらせ、読者に印象づけようとする方法である。典故は当然そこに典故が使用されていることを知らなければ理解できず、従って一定水準の知識や教養がなければ理解不可能であることになる。つまり典故の使用は、読者が作者と同じ知識を持つことを前提としているのであり、文学(根源的には識字能力)が一部の限られた人々の特権的所有物つまり伝統的知識人階層の文学であったことから成立した技法であったと考えてよいだろう。

## 1-2. 典故が保証するもの

さて典故の出所(出典・典拠)は、伝統的知識人の世界において権威ある基礎的教養書に凡そ限定されていた。例

例えば『詩經』『書經』を代表とする儒教の經典、孔子とその弟子の言行録『論語』、『史記』『漢書』などの史書、『莊子』などの思想書、『楚辭』などのいわゆる文学書であった。また唐代以後では、梁・昭明太子が編纂した『文選』が詩文創作の教科書的存在であった。出典とされた「権威ある基礎的教養書」の範囲を厳密に決定するにはあるいは帰納的な手法により調査するしかないかもしれないが、いまはひとまず伝統的知識人の共通教養と認識されていた書籍としておく。

典故を用いたときに修辭的に期待される効果は前節に書いた通りだと思われる。ただ典故の使用はそれにとどまらず、字句や作品の意味・解釈の安定性・不変性を共通教養によって保証する機能も有していたのではないかと考えられる<sup>(6)</sup>。

つまり出典が儒教經典のような権威ある基礎的教養書であるならば、その書物にかかる解釈・意味は、解釈学・注釈学の討論の俎上へのぼる部分は当然あったとしても、安定しており不変である。少なくともそう信じられていたと考えてよかろう。そしてそれを典故として作品に使用することにより、出典の意味・解釈上の安定性・不変性に支えられて、典故を使用した作品あるいは字句が意味や解釈のレベルにおいて安定性・不変性を有することになる。証明はできないが、逆にそういう暗黙の締約がなければ典故の技法は成立しなかったであろう。

すなわち出典が、それを典故とした作品が制作された時の意味を、以前より持ち続けそして以後も変わらずに持ち続けるということであるのだから、それを典故として使用することによって作品や字句に与えられた当初の意味は、当初のまま解釈されるという安定性・不変性が期待されるということである。

中国の伝統的知識人層という原則として同じ水準の知識を共有する集団はいわばひとつの文学共同体であり、共通教養の範囲における典故の使用は、作者・読者に同じ意味・解釈を保証するプロトコル(約束事)なのであった。共通教養から逸脱しない限りどのような典故を用いようとも作者の意図は読者に正確に伝わるという保証が、伝統的知識人の世界における詩文の生産、受容、交換、流通などを支えていたと考えてよいであろう<sup>(7)</sup>。

### 1-3. 共通教養

前節において一定水準の知識や教養、伝統的知識人の共通教養なる表現をした。

しかしもとより知識や教養の質量は個人によって差異があり、それゆえに博覧強記、博学、博物などが知識人を賞賛する指標となっていた。前掲前野氏は『世説新語』などには一座の知識人がわからなかった典故を指摘してその博識を称賛された逸話が多く記録されていると述べる<sup>(8)</sup>。『世説新語』より例を拾うならば、次の言語篇の挿話がそれに類似しようか。

晉武帝始登阼、探策得一。王者世數、繫此多少。帝既不說、羣臣失色、莫能有言者。侍中裴楷進曰、臣聞天得一以清、地得一以寧、侯王得一以爲天下貞。帝說、羣臣歎服。

晋の武帝 始めて登阼し、策を探りて一を得たり。王者の世数は此の多少に繫る。帝 既に説ばず、群臣 色を失ひ、能く言う有る者莫し。侍中裴楷 進みて曰く、臣 聞くならく 天は一を得て以て清く、地は一を得て以て寧く、侯王は一を得て以て天下の貞と為ると。帝 説び、群臣 歎服す。

桓玄既篡位、將改置直館、問左右、虎賁中郎省、應在何處。有人答曰、無省。當時殊忤旨。問、何以知無。答曰、潘岳秋興賦叙曰、余兼虎賁中郎將、寓直散騎之省。玄咨嗟稱善。

桓玄 既に位を篡い、將に改めて直館を置かんとして、左右に問う、虎賁中郎省は、應に何處に在るべきかと。有る人 答えて曰く、省 無しと。時に当りて殊だ旨に忤らう。問う、何を以て無きを知るかと。答えて曰く、潘岳の秋興賦の叙に曰く、余は虎賁中郎將を兼ね、散騎の省に寓直すと。玄 咨嗟して善しと稱す。上の挿話は、西晋の武帝・司馬炎が即位した時くじを引くと「一」が出て不機嫌になったことを臣下たちが取りなすことができない中で、裴楷が『老子』第三章「昔之得一者、天得一以清、地得一以寧、神得一以靈、谷得一以盈、萬物得一以生、侯王得一以爲天下正。」を引用し、武帝の機嫌がなおったことを伝える。下の挿話は、東晋を篡奪した桓玄が虎賁中郎の役所がないと聞いて気を損ねた時、臣下の一人が潘岳の「秋興賦」序を引用し桓玄を感嘆させたことを描く。生殺与奪の権力を握る絶対的支配者の不快を当意即妙の機知<sup>(9)</sup>でとりなすこれらの挿話に共通するのは、周囲の者を凌ぐひとりの博識である。

論者がまず想定している一定水準、共通の知識・教養というのは、上の挿話に照らすならば、ひとりの博識に感服する能力がある皇帝や群臣のそれである。つまり指摘されればなるほどそうであったと反応できる水準である。

### 1-4. 蛇足

さて、現代の私たちが典故がモザイクのように用いられた中国古典の作品解釈において直面する困難の原因は、

それら作品が一定水準、共通の知識・教養を基盤とした伝統的知識人階層によって構成される文学共同体というヘルメティックな場トボスのみににおいて生産、受容、交換、流通していたことにほかならない。つまり、文学共同体の中にあつてこそ、典故の使用によって、作品の意味・解釈に安定性・不変性が保証されていたのであったのが、伝統的知識人階層の解体と学問の普遍化の中、それが必ずしも担保されない世界に向かって作品が開放・解放されてしまったのである。

伝統的知識人が消滅してしまったあとの時代の私たちは、文学共同体の中では常識、暗黙の了解であったプロトコル(約束事)すなわちここでは典故を説明するという、伝統的知識人にとっては多くの場合必要としなかった作業を経なければ作品を解釈できない。文学共同体において字句や作品の意味・解釈の保証をしていた典故が却って作品読解の障壁・障壁となってしまったのである。つまり、現代における中国古典受容の場にあつては、読者・受容者における一定水準のそして共通の伝統的知識・教養の断絶、あるいはそれらの質と量の絶対的低下が、作品解釈において超克しなければならない障壁を作りあげているとも言えるのである。一見あらかじめ存在するが如き障壁は私たちの中に内在すると考える方が妥当かもしれない。

さて「蛇足」がヘビのあしではなく余計な物事を意味することは、「猫」がネコを意味するのとは違いそれにまつわる故事の学習を必要とするが、このレベルでは現代の私たちと伝統的知識人の童蒙を啓くのとは同じレベルであろう。古今を通じた常識と考えてよい。しかし本論の後に例示する「過庭(之訓)」が『論語』季氏篇に依拠する言葉であることは、現代においてはもはや高度の知識のレベルに属し、常識ではない。同様に『庭訓往来』という書名を見てすぐにその書名の意味や基づくところを理解できる人も現代では少数であろう。

このような状況の下、現代においては、日本、中国の双方にあつて中国古典詩を読解・鑑賞する場合、一般的な注釈書では必ずといってよいほど字句の出典についての説明がなされる。また研究レベルにおいては、個人的な経験ではあるが典故が説明できないゆえに字句や作品の理解に支障を来すことも少なくないのである。

## 2. 典故とその注釈の実際

### 2-1. 典故の実例

本節ではまず典故の実例について、わかりやすい例を用いて確認しておく。

杜甫「登兗州城樓(兗州の城樓に登る)」(『全唐詩』卷二二四<sup>(10)</sup>)という作品を掲げる。

東郡趨庭日	東郡 庭に趨する日
南樓縦目初	南樓 目を縦まにす初め
浮雲連海岱	浮雲は海岱に連なり
平野入青徐	平野は青徐に入る
孤嶂秦碑在	孤嶂には秦碑在り
荒城魯殿餘	荒城には魯殿 <small>のこ</small> 餘る
從來多古意	從來 古意多し
臨眺獨躊躇	臨眺して独り躊躇す

ここでは第一句の「趨庭」に注目してみる。黒川洋一『杜甫詩選』(岩波書店、1991年)により、必要な箇所の注釈と訳を示す。本詩は「五言律詩」であり、杜甫が「河南・山東に放浪生活を送っていたころ、兗州都督府司馬の官にあつた父の杜閑を訪れた折の詩。七四二(天宝元)年、三十一歳のころの作。」とされる。首聯の訳は「東郡の地で父の教を奉じている日にあつて、州城の南樓で眺めをほしひまにすその初めのときよ。」(下線・川口)とある。注釈は「○東郡 秦のときの郡名で、兗州はその郡に属していた。○趨庭 庭さきを走りまわる。『論語』季氏篇に、孔子の子の鯉が「庭を趨って」過ぎたとき、父の孔子が呼びとめて「詩」と「礼」とを学ぶようにさとしたとあるのにもとづき、子供が父の教を受けることをいう。この『論語』のことばを使用するのは、兗州のすぐ東に孔子の故郷である曲阜があることによる。」とある。

黒川氏の訳注によって、私たちは第一句に典故が用いられていることを知り、「趨庭」が『論語』季氏篇を典拠とする言葉であり、季氏篇に記された故事により「趨庭」は文字どおりの「庭さきを走りまわる」ではなく、「父の教を受ける」ここでは父のもとを訪れるという意味であることが理解可能となる。

### 2-2. 注釈と伝統的知識人共通の知識・教養の水準

さてどう考えてみても三十を過ぎた杜甫が庭先を走りまわるのは滑稽であり、伝統的知識人ならばここに『論語』



が典故として用いられており、季氏篇の挿話全体も想起して「趨庭」の意味を理解したはずである。このようなことが、作者・読者の双方にあっていわば自動的にできることが先に述べた一定水準の知識・教養が共有されているということである、と論者は想定している。しかしながらそれがわからない者にとっては、上記の黒川『詩選』のような注釈が必要となる。

それゆえ、中国古典文学に対する伝統的知識人による研究は、作品の制作背景の注釈、作品に関わる人物の伝記的事実の考証、歴史的・地理的考証などとともに、小川環樹氏がつとに指摘するように<sup>(11)</sup>、字句に用いられた典故の出典を詮索することに多くの紙幅がさかれたのである<sup>(12)</sup>。小川氏の論をまとめれば、字句の出典をつきとめるのは、その解釈、文字の訓詁を明らかにするためであり、同時に、作者のレトリック（修辞の苦心）の解明となった。例えば、ある作品の字句が経書の言葉を使って組み立てられているならば、その原文を探し出し、さらにはその注釈を見れば原文の意味が理解でき、したがって作品における意味も明らかになる。故事による典故についても同じであり、その典拠をつきとめたうえで故事の文脈が解明されることにより、その典故がより明確に理解されるのである。

ここで問題として浮かび上がるのは、伝統的知識人共通の知識・教養の水準と注釈との関係である。伝統的知識人ならばおそらく上述の「趨庭」は調べなおすことなく理解可能であったと思われる。しかし一方で例えば唐代に入ると李善や五臣による『文選』の注釈が上梓されており、また李善注には『詩経』『書経』『春秋左氏傳』『論語』『老子』『莊子』『史記』『漢書』などの基礎的教養物も多く引かれている<sup>(13)</sup>。注釈が書かれるのはそれが必要とされるからであり、それが通行するのはその存在価値が認められていたからである。つまり当時の知識人であっても一般的には李善や五臣の注釈が『文選』読解の助けとなっていたということであろう。時代背景や地域格差を精査しなければ軽々に結論は出せないことであろうが、共通の知識・教養の水準、ここでは常識として諳んじられ身につけているレベルを那辺に置くかは課題でありうるかもしれない。

ちなみに『新唐書』卷二〇二・文藝列傳中・李邕列傳が伝える次の有名な挿話はこの問題の解決に示唆を与えてくれるであろう。

邕少知名。始善注文選、釋事而忘意。書成以問邕、邕不敢對、善詰之。邕意欲有所更。善曰、試爲我補益之。邕附事見義、善以其不可奪。故兩書並行。

邕 少くして名を知る。始め善の文選に注するに、事を積して意を忘る。書 成りて以て邕に問えども、邕敢えて對えず、善 之れに詰まる。邕 意に更うる所有らんと欲す。善 曰く、試に我が爲に之れを補益せよと。邕 事に附して義を見わし、善 其の奪う可からずと以う。故に兩書 並び行なわる。

李善注は「事を積して意を忘る」、事類(典故の運用)の探求を専らにして作品の意味解釈には意を注がなかったと伝える。これに関連して、小尾郊一氏は「李善注が行われてから、『文選』はますます流行したが、その注は引書のみ多く、正文の意味にほとんど触れぬため、一般の人には注自体が、読みにくくなった。その欠点を補うため、引書の方法をとらず全体の意味をわかりやすくするためのいわゆる『五臣注文選』が出てきた。」(下線・川口)<sup>(14)</sup>と説く。「一般の人」に李善注自体が「読みにくい」ものとなっていたとするのに従うならば、それが当時(唐代)の「一般の」知識人の共通の知識・教養の水準であったと推測できるかもしれない。

なお上記に関しては岡村繁氏の右の論が参考になるかもしれない<sup>(15)</sup>。岡村氏は、隋の文帝による「学問・教養を基盤とする漢魏以来の典雅な伝統的詩文に回帰する」詩文改革と科挙制度の開始により士人たちに求められるようになった「伝統的詩文の作風を習得する場合、中央・地方の官僚たちにとっても科挙受験志望者たちにとっても、その学習に是非とも必要になってきたものは、古来の伝統的詩文を手取り早く効率的に学習できる手頃な参考書」であり、それが『文選』であったと述べたあと、「梁末・北周の華艶な宮廷文学にせよ、『文選』のような漢魏以来の典雅な伝統的詩文にせよ、およそ高度な南朝貴族文学は、南北朝末期、大多数の一般士人階層には所詮ほとんど無縁なものでしかなかったに違いない。まして当時、関右を中心とした華北地方の場合、歴代宮廷秘閣における蔵書数の貧弱さからも容易に推察がつくように、一般士人の文化水準はかなり立ち遅れていたと見てよい。かかる時点、かかる地域に、前述のごとく隋の文帝の詩文改革と広汎な人材登用の大方針が打ち出されて、人々がその対応に振り回されていた矢先、まことに時宜を得た蕭該の『文選音』（『文選』の史上最初の注）の出現は、恐らく人々の渴を医するに足るものがあつたであろう。」(下線、括弧内・川口)と述べる。してみると、李善により『文選』注が著わされて初唐の顕慶三年(六五八)に上表され<sup>(16)</sup>、その注に多くの基本的書籍が引かれるのも「一般士人」の知識・教養水準の低下が大きな要因ではなからうか。そして李善注によってすらなお多くの士人に『文選』の読

解が困難であるが故に開元六年(七一一)に上表された<sup>(17)</sup>五臣注が登場したのであるならば、南北朝末から隋唐の動乱が旧来の知識人階層に及ぼした文化的打撃、影響は大きなものであったと推測できようし、また彼らに代わり李善注・五臣注による学習を必要とする新興の知識人階層が抬頭してきたことがこの点からも傍証できるのではなかろうか。

さらに論がずれるが、上述のことに関しては内藤湖南が類書の機能について述べる次の文章が参考に値しよう。

かかる類書の必要は、六朝や唐の人が文章特に駢文を書く爲めに起こつたのである。即ち典故を知ること、對句となるべき麗しい文句を作る材料を知る必要から來てゐる。かかる類書を要求するところの、文章の辭藻・典故を知る必要から起こつた一種の學問が、後世支那の學問の發達に少なからぬ關係があり、單に文學上のみならず、經學・史學に於ける新しい研究的學問の基礎をなすに至つた。……文を作るに、典故・辭藻を必要としたのは、一つは又、天子の祕書として中書・翰林があつて、天子の詔勅を書き、天子の批答を書き、もしくは上表の如き公文を書く爲めであつて、單に六朝より唐にかけて駢文が流行した爲め、その文を麗しくするといふ一般の要求ばかりではなく、朝廷の官職上實際の必要があつたのである。これは後に宋代になると辭學又は詞學といはれ、王應麟の玉海などは、全くその必要から出來たものである。(下線・川口)<sup>(18)</sup>

ここには六朝、唐の知識人たちが優れた駢文を書くために典故、對句の材料を知る必要から類書が生まれたことが述べられている。つまり知識人は一般に駢文の修辭を凝らすためには類書の助けが必要であつたということであり、類書を用いて駢文を書くことができるという水準が当時の知識人共通の知識・教養であつたと思われる。そして駢文創作に限らず、詩文全般において優れた典故、對句を追究するときにも類書がその助けを果たしたことは確かであろう<sup>(19)</sup>。

またこれに関して、典故についての極めて重要な先行研究であり、本論も大いに啓発と恩恵を受けている福井佳夫『六朝美文学序説』第五章「典故－美文の修辭(四)－」(汲古書院、1998年)は、典故の技法の發展について、

……漢代の儒教一尊から六朝の玄儒文史の並綜へと移行する、おおきな思想の潮流を背景としつつ、六朝貴族たちのあいだでおこつた博学多識をこのむ風潮が、物知り競争や典故技法が流行する温床となり、また逆に、そうした物知り競争や典故技法の流行が、いっそう六朝貴族たちのあいだに、博学多識をこのむ風潮をあおりたてていった、と云つてよいだろう。

と述べたあと、

……六朝文人たちは幼少の頃から膨大な書籍をまなんできているので、古典などは自家薬籠中のものとなつていたはず、……やはり彼らといえども、その教養のおおくは類書によつていかにかんがえねばならない。

と指摘する。博学趣味の六朝知識人においても類書は便利な「虎の巻」(・福井氏)であつた。そのことは伝統的知識人の知識・教養の水準を知る手がかりとなろう。

### 2-3. 注釈の実例とその周辺

ここでは古典的、伝統的注釈の実例とそれにまつわる論者の気付きを記述する。

さて小川氏が指摘するように、一般的に詩文に対する注釈が字句の典拠を示すことに重きを置いたということは、逆に注釈は往々にして李善注と同様に詩意や文意を説くこと(解釈)にほとんど関心を向けなかつたということである。

このことについて、先の杜甫「登兗州城樓」詩に見えた「趨庭」に対する伝統的注釈の様相の觀察によって確認してみよう。杜甫は「詩聖」として評価されたために多くの詩注がさいわいにも存在しているので、検討対象としては最も相応しいと言えよう。

杜甫詩の「趨庭」は『論語』季氏篇の父・孔子と子・孔鯉にまつわる挿話に由来していた。黒川氏の注に要約があつたが、その挿話全体を掲げる。

陳亢問於伯魚曰、子亦有異聞乎。對曰、未也。嘗獨立。鯉趨而過庭。曰、學詩乎。對曰、未也。不學詩、無以言。鯉退而學詩。他日、又獨立。鯉趨而過庭。曰、學禮乎。對曰、未也。不學禮、無以立。鯉退而學禮。聞斯二者。陳亢退而喜曰、問一得三。聞詩、聞禮、又聞君子之遠其子也。

陳亢 伯魚に聞いて曰く、子も亦た異聞有るか。對えて曰く、未しと。嘗て独り立つ。鯉 趨りて庭を過ぐ。曰く、詩を学びたるかと。曰、未しと。詩を学ばずば、以て言う無しと。鯉 退きて詩を学ぶ。他日、又た独り立つ。鯉 趨りて庭を過ぐ。曰く、礼を学びたるかと。對えて曰く、未しと。礼を学ばずば、以て立つ無しと。鯉 退きて礼を学ぶ。斯の二者を聞けりと。陳亢 退きて喜びて曰く、一を聞いて三を得たり。詩を聞き、

礼を聞き、又た君子の其の子を遠ざくるを聞けりと。

孔子の弟子・陳亢が孔子の子・鯉に弟子たちがまだ知らない孔子の言行を取材している場面であろう。孔子の生前から弟子たちによって師の言行録の編纂が準備されていたことを示唆するような挿話である。内容は、孔子の前を孔鯉が「庭」を「趨」して通り過ぎた時、孔子が「詩」と「禮」を学ぶことの重要性を論じたものである。さらに、「君子」は教育においてはその子に手取り足取り教えないものであることが語られている。

ちなみに、少なくとも論者にとってこの挿話を読んだだけでは「趨庭」が「父の教えを受ける」「父のもとを訪れる」という意味になることをにわかに理解することはできないのであるが、それに関してはのちに「趨庭」という詩語の用例の検討を通して説明してみたい。

次に伝統的注釈の実際を検討してみる。宋代の杜甫詩の注で「趨庭」に典拠の『論語』を明示して注するのは、南宋の魯訢・蔡夢弼『杜工部草堂詩箋』巻一であり、「公父閑嘗爲兗州司馬。公時省侍之。故云、趨庭。……論語、鯉趨而過庭。」と注する。

次に他の代表的な杜詩注の注釈態度を確認すると以下の通りである<sup>(20)</sup>。

郭知達『九家集注杜詩』巻十七「趙云、公在夔峽賦熱時、有云、何似兒童歲、風涼出舞雩。則小年在兗州矣。意者、公之父爲官於兗而公隨侍。乃若鯉趨而過庭耳。今此當壯年爲布衣時、再遊兗縱目初則追兒童時耳。」とする。『王狀元集百家注編年杜陵詩史』巻一、『分門集注杜工部詩』巻五、黃希・黃鶴『補注杜詩』巻十七、高楚芳『集千家註批點杜工部詩集』巻一、徐居仁『集千家註分類杜工部詩』巻十四は、「趨庭」に係る注はない。

明の邵寶『杜少陵先生分類集註』巻十九は、「天寶初、公父閑嘗爲兗州司馬。公往省視。故得趨庭。」と注し、邵傳・宇都宮由の頭注『杜律集解』巻一は邵注・宇都宮注ともそれを襲うが、共に『論語』を明示しない。

清の錢謙益『杜工部集（錢注杜詩）』巻九は「趨庭」に「甫父閑嘗爲兗州司馬。」と注し、朱鶴齡『杜工部集輯注』巻一は注釈しない。呉見思『杜詩論文』巻一は「公父閑嘗爲兗州司馬。故曰、昔者東郡趨庭之日。」と釈する。盧元昌『杜詩闡』巻一は題下注に「時公父閑爲兗州司馬、公省親之兗。」とする。黃生『杜詩說』巻四は「趨庭」に触れない。仇兆鰲『杜詩詳註』巻一は題下注に「蔡夢弼曰、公父閑嘗爲兗州司馬。公時省侍。故有趨庭句。」、浦起龍『讀杜心解』巻三之一は「弼注、公父閑爲兗州司馬。公時省侍。」、楊倫『杜詩鏡詮』巻一は題下注に「蔡注、公父閑爲兗州司馬。公時省侍。」とし、蔡夢弼『草堂詩箋』を襲う。

なお杜甫が「趨庭」する時については、『九家注』は明確に父が兗州司馬であったときの少年時代の回想とするが、ほとんどの注は作詩の現在とするようである。「趨庭」の挿話が孔鯉の子供時代であるのでそれにびたりと合わせて解したと考えられ、通説とは異なるおもしろい解釈ではある。『杜詩論文』もこの立場を襲っている。

ちなみに本邦森槐南『杜詩講義』（明治四五年）、鈴木虎雄『杜少陵詩集』巻一（昭和三年）は『論語』を引き注釈を施す<sup>(21)</sup>。

杜甫「登兗州城樓」詩の「趨庭」にかかる代表的な注釈書の態度は上記の如くであった。次にいま一例の杜甫詩の「趨庭」について確認しておこう。杜甫「送大理封主簿五郎、親事不合（婚姻がうまくいかず）、卻赴通州（実家のある地）。主簿、前閩州賢子。余與主簿平章鄭氏女子垂欲納（一有采字）、鄭氏伯父京書至、女子已許他族。親事遂停」（『全唐詩』巻二三二）の冒頭に「禁禱去東牀、趨庭赴北堂。」とある。詩題から杜甫が仲人のようなことをしていたのが知られ、当時の士人の生態を知る上で興味深い作品ではあるが、それはさておき、諸注釈を掲げる。

宋の『九家註』巻三三は「論語、鯉趨而過庭。」、『百家注』巻二九、『分門集注』巻九は「（王）洙曰、語、陳亢問於伯魚亦有異聞乎。對曰、未也。嘗獨立。鯉趨而過庭。曰、學禮乎。對曰、未也。不學禮、無以立。鯉退而學禮。」、『補注杜詩』巻三三は「洙曰」としながら「禮」を「詩」としている。なお前者二注釈が「禮」とするのは詩の題材が婚姻（婚礼）であるからだと考えられる。『草堂詩箋』巻三五「論語、鯉趨而過庭。」、高楚芳『集千家註』巻十八は注なし。徐居仁『集千家註』巻八は『補注杜詩』に同じ。明の邵寶『分類集註』巻四は注なし。

清の『錢注』巻十七、『輯註』巻十八、『論文』巻四八、『闡』巻二九、『詳註』巻二一、『心解』巻五之四、『鏡詮』巻十八は、いずれも『論語』に言及しない。本邦の鈴木注巻二一は「登兗州」詩を参照というかたちで『論語』を示す。

さて全ての杜甫詩の注釈書にあたったわけではないが、以上の「趨庭」の注釈状況を概観すると本邦の注を除いて宋人の注釈では「趨庭」の典拠を『論語』としてを明示しているものもあるが、清人の注釈は全く触れない<sup>(22)</sup>。この相違については、まず吉川幸次郎氏が指摘するように『分門集注』『草堂詩箋』『千家註』などの杜詩注が営利出版であったことが参考になろう。さらに吉川氏は蔡夢弼『詩箋』がその自序に「近ごろは科挙の試験に詩が加えられ、しばしば杜甫の詩から出題される、受験生諸氏のお役に立ちたい」<sup>(23)</sup>と云うような俗書であったと指摘さ



れる。してみると営利出版の杜詩注釈書は受験参考書という性格を強く持つものであったと考えられる<sup>(24)</sup>。またこれに加えて、宋代における知識人層の拡大にともなう知識・教養の格差の拡大により、レベルの低い知識人によっては基礎知識に属する「趨庭」にも注釈が必要となったということであろうか。吉川氏の述べるように『分門集注』『草堂詩箋』が俗書<sup>(25)</sup>であるならば「趨庭」の典拠を明示することも「俗」すなわち「雅(正統)」ではなかったことになる。ただし『論語』の当該箇所引用のみによって注釈の機能を果たしていたとするならば、注の読者はそれだけで挿話が『論語』諸篇のうちの季氏篇のものであることに見当が付き、且つ挿話全体を想起するか或いは確認しなおすことによって「趨庭」の意味が理解できたわけであり、現代の私たちと比較すればそれはそれで相当の知識であると評価できよう。

このような推論が妥当であるとすれば、清の学者による杜詩注が『論語』を明示しない態度、あるいは「兗州」詩の例えば『詳註』のように「公父閑、嘗爲兗州司馬。公時省侍。故有趨庭句。」と示唆しか与えない態度が理解できるだろう。清代の注釈家にとっては「趨庭」は注釈を必要とするまでもない極めて基礎的常識的典故であったということである。更に言うならば「趨庭」が『論語』を典拠とすることを明示することは学者としては「雅」にあらざる慎まれる行為であったのではなからうか。その点、同じ時代の注釈でも朝鮮の李植の『纂註杜詩澤風堂批解』卷二三が「洙曰、語、鯉趨而過庭。」と注するのは、杜甫詩を本邦のようにいわば異国の文学として受容するにあたって必要なことであったとも考えられよう。

論が少しく錯綜したが、総じて如上の杜詩の「趨庭」に対する注釈から見えてくることは、少なくとも私たちにあっては冷淡で不親切な(これが雅の本質であろう)注釈態度である。逆にいくつかの宋人の注は典拠の引用をするという意味で幾分なりとも私たちに親切であると言えるが、「釋事而忘意」とう態度は貫かれている。

そして典拠のみを示す伝統的な注釈態度は周知の通り現代の中国人研究者にも継承されている。杜甫の詩注の最新書といってよい謝思焯『杜甫集校注』(上海古籍出版社、2015年)は「登兗州城樓」(卷九)の「趨庭」に「《論語・季氏》:「嘗獨立, 鯉趨而過庭, 曰:『學詩乎?』」對曰:『未也。』『不學詩, 無以言。』」鯉, 孔子之子。《草堂》蔡夢弼注:「公父閑嘗爲兗州司馬, 公時省侍之。」と典拠を示すのみである。また「送大理封主簿五郎」(卷十七)の注では「登兗州」詩を参照させる。

ここで、上記の謝氏注に典型的な「釋事而忘事」的傾向が現代中国の古典作品訳注にあってもすこぶる根強いことについては、つとに松浦知久氏が課題視している<sup>(26)</sup>。その中で松浦氏は口語散文訳が稀な理由について中国人研究者に聞き取り「白話による全訳を一流の学者の仕事と認めたがらない傾向がある」とことと「万一、大きな誤訳をした場合、訳者も出版社も明々白々に鼎の軽重を問われやすいため」の二つの状況を指摘している。さらに「通釈的要素に重点を置いた『五臣注文選』を唐の李濟翁が痛烈に乏めて以来(『資暇録』非五臣)<sup>(27)</sup>、『五臣注』を批判して『李善注』を褒めるのは、学界の慣例ようになってきた。」との学術的背景を指摘する<sup>(28)</sup>。

前者の「白話」云々の理由・背景については、文言と白話に伝統的に存在した格差意識、つまり文言、古典中国語の運用能力を有した「士」(知識人)とその能力を持たない「庶」との間の格差意識と通底しているのではないかと論者は推測する。伝統的知識人の世界にあっても、詩意や文意の「通釈」(解釈)は、表現の緊密性あるいは圧縮性を追究した文言作品とくに詩歌を解き積といて緊密・圧縮を弛緩させる、つまり敷衍する平たく言えば文字数を増やすという意味で、いくばくなりとも白話化への志向を孕んでいると認識されていたに違いない。それゆえ「事を積して意を忘る」の「釋意」は「一流の学者の仕事」と認められず忌避される傾向にあり、一方の「釋事」は緊密な文言で書かれた作品について緊密な文言で書かれた典拠を示す営為であるので白話化志向は意識されず安定的な詩文注釈の方法となったと思しい。

またこれに関わると思われるが、岡村繁氏<sup>(29)</sup>が紹介する『五臣注文選』に対する宋・丘光庭の「乖疎」偽妄、蘇軾「俚儒(田舎学者)の荒陋(粗雑浅薄)」(括弧内は岡村氏)という批判にも「疎」「俚」の用辞から垣間見ることができる。敷衍的、白話的な解釈に対する嫌悪がその根底に存在するのではなからうか。また岡村氏は宋代の『文選』刊行の状況を分析し、「宋代に刊行された『李善注文選』は、……国家の文教を指導する立場にあった当時最高の行政機関か、当時有数の碩学官僚による権威ある校刊本」であるのに対して、「宋代に各地で陸續と出版された『五臣注』および『六家注』『六臣注』の『文選』諸刊本は、……いずれも面白いほどに一致して、地方都市の坊肆書買から田舎学者による一般書生向けの出版書であった。」(下線・川口)と述べる。岡村氏の「田舎」「一般」という評価は、「雅」ならぬ「俗」、言語的には「雅言」ならぬ「俗語」という対立の構造がはからずも反映されたものではなからうか。

このあたりに中国古典文学の伝統的注釈と現代の「一流」の学者の注釈とが「通釈的要素」を排除し、典故の出典の詮索に意を多く注ぐ根源的理由が存在するのではなからうか。

なお中国における杜甫詩注の集大成的事業成果と見做しうる蕭滌非『杜甫全集校注』（人民文学出版社、2014年）は「趨庭，《論語・季氏》：『嘗獨立，（孔丘之子）鯉趨而過庭。』孔子教以學詩、學禮。後遂以『趨庭』為承受父教之代稱。王勃《滕王閣序》：『他日趨庭，叨陪鯉對。』蔡夢弼曰：『公父閑，嘗為兗州司馬，公時省侍之，故云「趨庭」。』』と先行用例である王勃序や蔡夢弼『草堂詩箋』を引いて注する。これが現代中国における「一流の学者」としての「仕事」のいわば限界であろうか。

ただ補足しておかなければならないのは、現代中国においても、韓成武・張志民『杜甫詩全訳』（河北人民出版社、1997年）など中国古典口語訳の試みもなされていることである<sup>(30)</sup>。該当部分の訳注を引くと、注釈「《論語・季氏》：“鯉趨而過庭”，講的是孔子教育其子鯉的故事。後因以指子承父教。這里指作者前來兗州探看父親。」、訳文「來兗州探望父親的日子里，……」とある。訳文が明示されていることは現代中国の古典訳注においても稀であると見受けられ評価されるべきであろうが、注釈の『論語』の引用部分だけでは故事全体像が把握できず、「趨庭」が何故訳文のような意味になるのか理解が難しい。ただし「送大理封主簿五郎」詩の注では『論語』の該当挿話を「嘗獨立。……不學詩，無以言。……不學禮，無以立。鯉退而學禮。」と詳しく引き「後因以“趨庭”謂子承父教。此以“趨庭”指封主簿五郎婚事未成，返回家園。」と注し「爾就要起身回家探望爹娘。」と訳す。これならば前掲黒川『詩選』のように「親切」であろう。

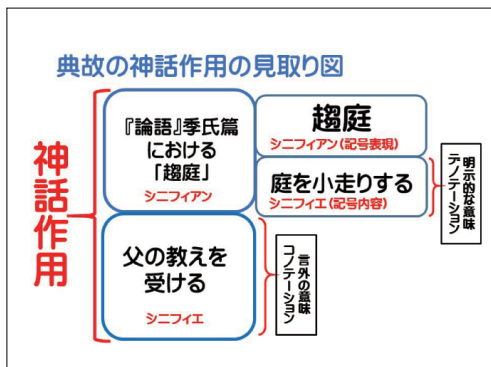
### 3. 現代の文学理論から見た典故の仕組み

#### 3-1. 記号論的視点からの典故の検討

本節ではもはや陳腐な方法論に属そうが、記号論的な視点から典故の仕組みを分析してみる。

周知の通り記号論<sup>(31)</sup>は個々の言葉をシーニュ（記号）と考え、それを音と意味との二つの側面から捉える。音はシニフィアン（記号表現）、その意味はシニフィエ（記号内容）と呼ばれる。日本語において例えば「いぬ」という音を聞いて、私たちは「ワンワンと吠える動物」を想起する。つまり「いぬ」という音と「ワンワンと吠える動物」という意味は不可分に結びついている。ただし「いぬ」と「ワンワンと吠える動物」、つまり音と意味との結びつきは、あらかじめ決められたものではなく恣意的なものである。極端に言えば「いぬ」という音が「にゃーにゃーと鳴く動物」を意味し、「ねこ」という音が「ワンワンと吠える動物」を意味していたかもしれないのである。

さて前掲の杜甫「登兗州城樓」詩に立ち返ってみよう。論をわかりやすくするために、音をここでは漢字表記に



置換して考える。漢語は一漢字＝一音節＝一形態素の単音節語的性質を強く持つ故にあながち無理な置き換えではない。左図を参照されたい。漢字表記「趨庭」がシニフィアンであり、「庭を小走りする」という意味がシニフィエとなる。ここでポイントとなるのは「趨庭」はもともとより「父の教えを受ける」という意味を有したのではなく、『論語』季氏篇の挿話を典拠としてその意味が生まれた、ということである。

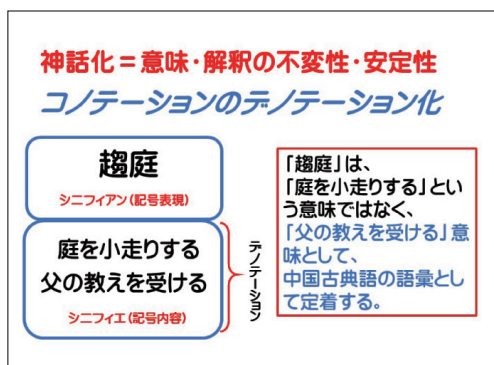
典故におけるこのような新たな意味生成は「神話作用」に擬えることができよう。左図に示した「神話作用」の仕組み、「言葉の明示的な意味(デノテーション)」、「言外の意味(コノテーション)」については竹田青嗣氏の例示的説明が明解である<sup>(32)</sup>。竹田氏によれば「「エキゾチック・ジャパン」というコピー……の明示的な意味(デノテーション)としては、東洋的(神秘的)な日本ということにすぎない。だが、このコピーがわたしたちに伝えるのは、日本は西洋以上に見るべきものがある、日本の奥深い魅力を再発見せよ、われわれの国日本は素晴らしい国だ、等々の言外の意味(コノテーション)である」ということである。またこのような考え方を示したロラン・バルトはその著書「神話作用」という書物の中で、現代社会には、人間が知らず知らずのうちに(無意識のうちに)ある意味作用の世界(神話作用)の中に投げ込まれているという側面があることを、鮮やかに示している」と竹田氏は紹介する。

竹田氏の説明にある通り本来「神話作用」は文字表象に限らず私たちを取り巻く現代の全ての文化的、社会的現象にあてはめるべきものであるが、ここでは矮小化を承知で典故の技法に当てはめてみることにする。すなわち典



故の仕組みを、「趨庭」の元来の意味である「庭を小走りする」という文字通りの明示的な意味(デノテーション)に対して、『論語』を典拠とした言外の意味(コノテーション)が生成するようなものだと考えておく。

続いて、このような典故の仕組みに係る図式を更に推し進めてみたい。本論の後半にその生成と継承をたどること



にすることが、「趨庭」という言葉は『論語』を典拠として生成され「父の教えるを受ける」という意味を有したあと慣用化され、中国古典においては「庭を小走りする」という元来の意味はむしろ背面に移行し、もっぱら「父の教えるを受ける」という二次的な意味が「趨庭」の元来の意味であるが如く用いられるようになったと考えられる。つまり左図のように、コノテーションがデノテーションとなったに同じい記号論的關係性を「趨庭」と「父の教えるを受ける」が帯びるようになったと見做しうるのである。

このように見做すことにより、論者は1-2で述べた典故の使用によって期待される字句や作品の意味・解釈の不変性・安定性につ

いて説明しうるのではないかと考える。いったい神話とは、学術的研究において新たな分析が処方される場合は除くとしても、一般的にその民族に受け継がれた不変、普遍、不朽、普及の意味を有し、それ故にその解釈も不変性・安定性を持っている。その不変性・安定性を獲得した時点で、コノテーション(言外の意味)であったものがデノテーション(明示的な意味)に極めて近似してくるのではなかろうか。ここでは「趨庭」が『論語』という「聖典」<sup>(33)</sup>に支えられてその不変的・安定的意味を獲得したことになると考えることはできないであろうか。

これに関して興味深いのは「趨庭」の辞書記述である。いま手許にある大型中型の辞書を概観すると『大漢和辞典』「子が父の教を受ける諭。又、其の家庭に至つて親しく教を受ける意。過庭。」、『角川大辞源』「子が父から教訓を受けること。……転じて、その家庭に向いて親しく教を受けること。過庭之訓。」、『漢語大辞典』「亦作“趨庭”。《論語・季氏》……後因以“趨庭”謂子承父教。」、『学研新漢和辞典』「**故事**家庭で子が父の教を受けること。」<sup>(34)</sup>(以上、下線・川口)とあり、また全ての辞書が『論語』を典拠として明示する。ここで注目されるのは全ての辞書が、論者が上にデノテーションとした「庭を小走りする」の意味を載せず、いきなりコノテーションの意味を掲げていることである。辞書は多くの用例から帰納的に意味を記述するものであり、上に述べたように「庭を小走りする」という元来の意味が背景化し「父の教えるを受ける」の意味が慣用化したのであるから後者が辞書に記載されることは納得できるとしても、前者が記載されないのは後者がほとんどデノテーション化していたことを傍証するのではなかろうか。

畢竟、典故とは、「聖典」ならずとも「古典」という権威ある(と考えられた)書籍や故事を支柱として意味・解釈において不変性・安定性を有する数多くの語彙のデノテーションを生成してきた機制であるとも言い換えることができよう。

ただこのように考えたときに二つの問題が生起する。「父の教えるを受ける」が「趨庭」のデノテーションであるならば、作者にとってはその使用、読者にとっては鑑賞において、典拠たる『論語』の挿話がほとんど想起されない、意識されないことになっているのではないかという疑問である。

前掲福井氏「典故－美文の修辞(四)－」は、このことに関して「典故の形式面の機能」の筆頭として「字句の経済」を挙げ、故事成語の「矛盾」について、

……読者はこの二字を一見するや、「つじつまがあわない」の意をさとるだけでなく、ほとんど瞬時に、矛と盾とをともにうりこもうとした、あの楚の商人の物語を脳裏に想起することだろう。つまり、ただ「相互に抵触して、たがいに相容れないことをたとえる」という辞書的な意義だけでなく、『韓非子』中のユーモラスな楚の商人の物語もふくめて、そのまるごとを読者に了解してもらえるのだ。わずか「矛盾」の二字が、典拠をふまえることによって、これだけおおくの情報をになうことができるのである。(下線・川口)

と述べる。これが穏当な考え方であることは論者も承知している。しかし福井氏が「ほとんど瞬時に」と表現していることは、別の見方をすると、典拠となったもとの挿話が瞬時にしか想起されないということにもなりえよう。論者はそれは想起しないのとほぼ同じではないのかと考えてもいる。

例えば現代の私たちは、「蛇足」という言葉を用いるときに、『戦国策』齊策二「昭陽爲楚伐魏、覆軍殺將得八城、移兵而攻齊。陳軫爲齊王使、見昭陽、再拜賀戰勝、起而問、楚之法、覆軍殺將、其官爵何也。昭陽曰、官爲上柱國、

爵爲上執珪。陳軫曰、異貴於此者何也。曰、唯令尹耳。陳軫曰、令尹貴矣。王非置兩令尹也、臣竊爲公警可也。楚有祠者、賜其舍人卮酒。舍人相謂曰、數人飲之不足、一人飲之有餘。請畫地爲蛇、先成者飲酒。一人蛇先成、引酒且引飲之、乃左手持卮、右手畫蛇、曰、吾能爲之足。未成、一人之蛇成、奪其卮曰、蛇固無足、子安能爲之足。遂飲其酒。爲蛇足者、終亡其酒。今君相楚而攻魏、破軍殺將得八城、不弱兵、欲攻齊、齊畏公甚、公以是爲名居足矣、官之上非可重也。戰無不勝而不知止者、身且死、爵且後歸、猶爲蛇足也。昭陽以爲然、解軍而去。」の挿話を想起しない、あるいは「蛇足」の由来である下線の故事さえも想起しないだろう。それは多くの場合において蛇足の由来を学習したあと、その故事を意識にのぼらせることがないからである。それと同様に知識・教養が十分備わった伝統的知識人たちならば「趨庭」という言葉をいわば常用語・日常語のように「父の教えを受ける」という意味で使用し、その典故が用いられた字句、作品の鑑賞においても『論語』の挿話をほとんど意識さえしなかったのではないかという疑問が論者にはある。そうなると古典(出典)との重層性によって作品世界を豊饒にするという典故の最も基礎的な機能とその修辭的効用も再検討を要することになるかもしれない。ただ論者にはこの問題設定自体に意味があるのか、あるとしてもその解決は可能なのか、見通しが立っていない。

いまひとつの問題は、二番目の図に示したように「父の教えを受ける」を「趨庭」のデノテーションとした場合、シニフィアンとシニフィエの関係が恣意的であると言えるか否かである。記号論的に考えると「趨」と「小走りする」、「庭」と「にわ」の結びつきは「いぬ」と「ワンワンと吠える動物」と同じく恣意的である。それが「趨庭」と「父の教えを受ける」とに当てはめうるか。後に論ずるが『論語』の挿話からまず生成したのは「過庭」という語であり、そのあと「趨庭」が造語された。してみると当該挿話からどの語を選び出すかは、挿話中の文字を用いるという制限があり且つその挿話を象徴的かつ修辭的に表現する語彙が選択あるいは造語されるという志向が前提とはなる。ただこの場合も選択や造語を行なった者の恣意が存在し、そこには「ワンワンと吠える動物」を初めて「いぬ」と呼んだ者と相似する恣意性があると思われる(ここで「者」と表現しているが個別具体的人格を言うのではない)。なおシニフィアンとシニフィエの関係は恣意的であるにせよ、その結びつきが言語の運用者たちに承認されなければその関係は消滅するのであり、この意味で多くの詩的言語が生成されては慣用化されなかった、更には消滅していったと推測される。ただやはり論者にはこのような疑問自体に如何なる意味があるのか見出せないでいる。

### 3-2. インターテクスチュアリティ的視点からの典故の観察

次にやはり手垢のついた理論となってしまったが、インターテクスチュアリティの視点から典故の仕組みについて考え直してみる。まず先行の研究書・概説書等<sup>(35)</sup>から論者なりに理解したインターテクスチュアリティの考え方(思考方法)は次の通りである。

インターテクスチュアリティとは、テキストの意味を、他のテキストとの関係性において考察するという思考の枠組みである。すべてのテキストは、それに先行するテキストからの引用によって成立している。すなわち無から生産されるテキストは存在しない。例えば、一篇の小説にあっては作者の生活史が言語・記憶・経験など様々なレベルで織りなされていると考えることができる。なおここでテキストとは文字、言語、文学作品に限定されることはない。テキストとは全ての事象である。



左図<sup>(36)</sup>を参照されたい。典故の出典がプレテキスト(先行するテキスト、引用元)であり、典故を用いた作品がテキスト(引用がなされるテキスト、後続のテキスト、引用先)である。引用元から引用先に引用されるテキストがインターテキストである。

プレテキストから、インターテキストが、後続のテキストに引用されるとき、インターテキストは、それだけがプレテキストから切り離されて、プレテキストとの関係を断ち切ってしまっ引用されるわけではない。インターテキストは、プレテキストの文脈における意味・位置づけを保持しながら、後続のテキストへ引用され、その新たな文脈において、新たな意味・位置づけを持つ

ようになるのである。インターテキストは、後続のテキストにプレテキストの世界を引き込み、その結果、後続のテキストをより豊穡な世界へつくりあげるのである。

ここでやはりこの理論を矮小化することを承知で典故の技法に当てはめてみる。ここでも『論語』季氏篇と杜甫「登兗州城樓」詩を題材とすれば、ひとまず次のように説明ができるであろう。同様に図を参照されたい。

(1) 儒教の經典であり儒教の開祖・孔子の言行録である『論語』の季氏篇(①)に見える孔子とその子・鯉のエピソードにある「鯉趨而過庭」と言う部分が、「趨庭」と変形され(②)、杜甫詩(③)に引用された。

\*「趨庭」の語彙は杜甫詩が初出ではないが、このように説明しておく。

(2) 出典において「庭を小走りして通り過ぎる」という意味であった部分は、孔子が我が子の教育をするという文脈に置かれていた。この部分は、孔子(父)の孔鯉(子)に対する教育態度というエピソードの文脈を保持しながら、杜甫詩に引用された。

(3) そして、引用された部分は、杜甫詩では、杜甫(子)が杜閑(父)を訪ねるという新たな文脈に置かれ、「庭を小走りする」という意味でしかなかった「趨庭」が、「父の教えを受ける、父のもとを訪ねる、父のもとに居る」という意味に変容した。

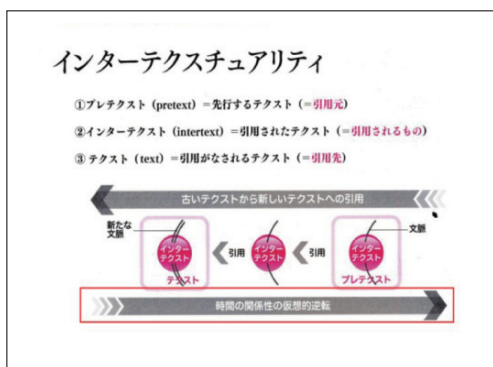
\*2-3で紹介したが、この作品の制作時期比定については『九家注』が異説を唱えている。該注は、父が兗州司馬であったときの杜甫の少年時代の回想とする。『論語』の挿話が父・孔子と「詩」「禮」を学んでいない頃の少年・孔鯉との挿話であるという時間的背景を考慮したものと思しい。本論でこの立場は取らないが、決して無理な解釈ではないと考える。

次に以上のことをふまえて、杜甫詩における「趨庭」の詩学的叙述を試みる。(1)父のもとに居ることをそのまま「父のもとに居る」と表現してしまうのは少なくともこの場合、詩の言語ではないだろう。(2)であるならば、それを典故という修辞技法を使って如何に表現するかが詩人の腕の見せ所となろう。(3)前掲黒川注にもあるように、この作品の制作場所が孔子の郷里の曲阜の近くであるから、『論語』が典故として杜甫に思いつかれたことは首肯できる。(4)ならば「趨庭」によって作品世界がどのように豊饒になっているのかが問題となる。(5)真摯な儒教信奉者であった杜甫にとって、自らの父子関係を孔子とその子に喩えるのはあるいは理想の表白であったかもしれない<sup>(37)</sup>。(6)少なくとも、この作品の懐古あるいは尚古、古に思いを馳せ憧憬するという主題の歌い出しとして典雅な雰囲気醸し出すことに成功しているであろう<sup>(38)</sup>。(7)また想像を逞しくするならば、杜甫と父の杜閑との関係は孔子と子の鯉との関係の如く父が子を手取り足取り訓育するのではなく、比較的冷淡な突き放した関係であったかもしれないことを付随的に読み取ることも可能であろう。なお、もしそうなら杜甫自身の家族や子供を描いた作品の検討に何らかの示唆を与えうるかもしれない。

さて如上の分析は、典故の技法をインターテクスチュアリティに単に置換しただけで、何ら新たな主張をしているわけではない。論者が、ここに敢えてインターテクスチュアリティを持ち出したのは、その理論が以下のように引用の関係性に変更を迫るからである。

次の論点に移ろう。

インターテクスチュアリティのベクトルを「先行のテキスト→後続のテキスト」のように一方通行的に考えるのは、旧来の引用論、典故論の枠組みと全く同じであり、インターテクスチュアリティという概念を持ち出す必要もなく、さほど有意義なことではない。ここで intertextuality の inter とは、「相互」「間」「中」という、双方向の関係性を実現化する意味を持つことが肝要となる。つまりインターテクスチュアリティは、先行のテキストと後続のテキストとの関係性を双方向的に考えることのできる自由さにその特徴がある。日常的な例として高速道路の interchang を想起されたい。まさにそこは双方向あるいはそれ以上の多様な方向性を持って自動車が行き交う場となっており、私たちはそこで inter の持つ意味を実体験しうるのである。



してみると、インターテクスチュアリティを持ち出すことで、私たちに「後続のテキスト→先行のテキスト」という方向性でテキスト間の関係を考えることが許可される。例えば、先行のテキストについて未知で且つ後続のテキストを知っている者が、先行のテキストを見た時に後続のテキストを想起するという現象は、誰でも経験したことではなからうか。これは、インターテクスチュアリティにおいて、仮想的に、先行のテキスト・後続のテキストの関係が逆ベクトルになったといえるのである。そうなると、先行のテキストが後続のテキストに引用されたあと、後続のテキストから逆照射されて先行のテキストに新たな意味が生起することも十分に想定しうるのである。

実は、後続のテキストが先行のテキストの読みを変質させたり、そのイメージを作



り変えるといったことは、ごく普通に生じていることなのである<sup>(39)</sup>。このようにインターテクスチュアリティの考え方は、テキストどうしの相対性・双方向性、interactive なあり方にこそポイントがあると考えることができよう。

ここで中国文学とは関係のない題材で、上記に係る説明をすることをお赦し頂きたい。ひとつはあまりにも有名な例ではあるが、映画『戦艦ポチョムキン』（セルゲイ・エイゼンシュテイン監督、1925年）と『アンタッチャブル』（ブライアン・デ・パルマ監督、1987年）である。引用場面は著名な『ポチョムキン』「オデッサの階段」である。叛乱を起こしたポチョムキン号を支持するオデッサの市民がコザック兵に虐殺される場面で乳母車が階段から落ちて行くというシーンは、『アンタッチャブル』においてエリオット・ネスのチームがアル・カポネの会計係を逮捕する駅の階段の銃撃戦の場面に引用されている。実は論者は『アンタッチャブル』を先に知り、その後『ポチョムキン』を見たときに、上記の先行のテキストと後続のテキストの仮想的な逆関係を体験している。『アンタッチャブル』では銃撃戦のなか階段を落ちて行く乳母車の赤ちゃんは無事であったが、『ポチョムキン』では赤ちゃんが無事か否かは描かれていない。してみると後続のテキスト『アンタッチャブル』は、先行のテキスト『ポチョムキン』が描かなかった赤ちゃんの安否を描くことにより、『ポチョムキン』の赤ちゃんも無事であるという結論、あるいは無事であって欲しいという願いを提示していることになるとの解釈が可能になるだろう。これは、後続のテキストが先行のテキストの虐殺場面に対する解釈を施しているのであり、つまりそれは後続のテキストが先行のテキストに対してひとつの解釈、意味づけという変容を迫っているということにほかならないであろう<sup>(40)</sup>。

いまひとつ題材とするのは、山崎豊子『白い巨塔』『続・白い巨塔』（1963年～1968年、以下『巨塔』）と三谷幸喜脚本『振り返れば奴がいる』（1993年、フジテレビ、以下『奴』）である。『巨塔』は何度も映像化されて人々に馴染みが深い。物語は浪速大学医学部を舞台に第一外科教授の座を狙う野心家の天才外科医である助教授・財前五郎と患者第一主義の研究者である第一内科助教授・里見脩二との友情と軋轢が軸となって展開され、財前の癌による死で幕を閉じる。『奴』は天真楼病院を舞台に助かる見込みのない患者の延命処置に否定的立場を取る傍若無人な天才外科医・司馬江太郎と患者第一主義の外科医・石川玄との闘争を中心にストーリーが進み、司馬の刺殺（正確には生死は不明）によって終結となる。周知の通り『奴』が『巨塔』にプロットを基づいたことは明白である<sup>(41)</sup>。

さて『巨塔』において、里見の財前への対応は友情に基づいたしばしばの忠告と財前の野望に起因する医療過誤に対して裁判原告側の証人となったことである。一方で『奴』では人権派石川の司馬に対する態度として「徹底し且つ執拗な攻撃」が描かれる。それは司馬の医療行為を医療倫理の立場から排除しようとする意図によるものであった。

ここで『奴』特に石川の司馬に対する徹底し且つ執拗な攻撃性を視座として『巨塔』を見た場合、『巨塔』の「財前＝野望の象徴、里見＝患者第一主義」という一般的な解釈の図式が書き換えられる可能性を孕むことに私たちは気付くはずである。

つまり『奴』における石川の司馬に対する攻撃を司馬の医療行為「自体」を阻むものであると捉えた場合、『巨塔』における里見の財前への対応も結果的には財前の医療行為自体への妨害であったと意味づけることができる。そして同時に『巨塔』において財前の天才的技倆により他の外科医にはできなかった手術を受けた患者が救済されたという「財前＝野望の象徴、里見＝患者第一主義」という解釈の構図の中で見逃されていた物語の事実があぶり出されるのではなからうか。財前が、また司馬が、神の手の如き技術によって困難な手術を成功させ、難治の患者の命を救ったことは否定できない物語的事実なのである。

私たちは果たして「財前＝野望の象徴、里見＝患者第一主義」というふうに『巨塔』の構図を単純に捉えてよいのであろうか。財前も天才的手術による難治の患者救済という「患者第一主義」側面を持ち、里見もまた財前の医療行為を妨げた、財前が命を救う機会を減殺したという意味で、自らの信念に従いそれを実現させんとする「野望の象徴」という側面を持つのではなからうか。

このような考え方が妥当であるとするならば、後続のテキストである三谷『奴』は先行のテキストである山崎『巨塔』に対して、物語の構図、意味の変容を迫るものと捉えることが可能となろう。もちろん変更を迫られた物語の構図や意味はもともとその物語に内在されており、その潜在が解き放たれたただけだとも考えることができるが、これは実は大した問題ではない。テキストの意味は受容者の分だけ増殖するからである。

以上のようにインターテクスチュアリティの視座に立つと、後続のテキストが先行のテキスト（の意味・解釈等）を如何に揺るがすか、如何に変容させるかという読みが私たちに許可されることになるのである。

このあたりで許された紙数が尽きた。未完待続。

【注】

- (1) 鈴木修二ほか『中国文化叢書4 文学概論』I 前野直彬「修辞論」(大修館書店、1967年)、前野直彬『中国文学序説』第二章「中国語と中国文学」(東京大学出版会、1982年)。
- (2) 本稿において作者、読者という用語を用いているが、それは作品の作り手、読み手というくらいの意味であり、作者論・読者論を展開するつもりはない。
- (3) 以下、『文心雕龍』に係る括弧内の解釈は、一海知義・興膳宏『陶淵明 文心雕龍』(筑摩書房、1968年)による。
- (4) 高橋和巳「劉勰『文心雕龍』文学論の基礎概念の検討」(『高橋和巳全集』第15巻、河出書房新社、1978年)。
- (5) 注(4)。
- (6) 大衛・ラットモ(David Lattimore)「引喩と唐詩 (Allusion and T'ang Poetry)」(倪豪士編選『美国学者論唐代文学』所収、上海古籍出版社、1994年)参照。
- (7) 川合康三氏は『李商隠詩選』「解説」(岩波書店、2008年)の中で「慣用化された典故は文学共同体のなかで固定されているために、何を言わんとするかの理解を助けるものともなる。」と述べる。また本論の「文学共同体」なる術語も川合氏に拠っている。
- (8) 注(1)前野『序説』。
- (9) これについては、井波律子『中国人の機知 『世説新語』を中心として』(中央公論社、1983年)がある。
- (10) 以下、本論における唐詩の引用は『全唐詩』(中華書局、1960年)により、その巻数を示す。
- (11) 「『文選』の訳注を読んで」(全訳漢文大系『文選』四・月報14、集英社、1974年)、『蘇東坡詩集』「あとがき」(山本和義共著、岩波書店、1975年)。
- (12) 直接訓詁に関係なく、単に使用された字句の初出と思しい箇所を示しているだけのような場合も多いように見受けられる。
- (13) 小尾郊一・富永一登・衣川賢次『文選李善注引書攷証』上巻・下巻(研文出版社、1990年・1992年)。
- (14) 注(13)上巻「解題」。原文の旧字体は新字体に改めた。以下、論著の引用は原則としてこのようにする。
- (15) 岡村繁『文選の研究』序章「文選学の歴史と課題」、第三章「さまよえる『文選』」(岩波書店、1999年)。
- (16) 富永一登『李善注文選の研究』第二章「李善の伝記と「文選学」の成立」(研文出版、1999年)。
- (17) 注(13)上巻「解題」。
- (18) 内藤湖南『支那史學史』八「六朝末唐代に現はれた史學上の變化」(『内藤湖南全集』第十一巻、筑摩書房、1969年)。
- (19) これに関して、韓艷玲「類書と詩-『初学記』「事対」を中心に-」(大阪市立大学中国学会『中国学志』随号、2002年)がある。『初学記』三十巻、二十三部、三百十三子目というボリュームは、『北堂書鈔』『藝文類聚』にくらべ検索、暗誦に便利であったと論ずる。ただし論中に「随時めくって読むのに」便利と述べるが、卷子本は「めくる」ものではないと論者は考える。
- (20) 吉川幸次郎『杜甫詩注』第二冊(岩波書店、2013年)に掲げる注釈書を参考にした。なお本文に掲げた以外の杜詩注釈書については、台湾大通書局『杜詩叢刊』を通覧したが、『論語』を注するものはなかった。
- (21) 森注「趨庭日といふ事は、是は孔子の息子さんの鯉といふ事は、是は孔子の息子さんの鯉といふのが日々に庭に趨つて侍養したといふことがございますから用ゐましたので、此趨庭といふ二字で親に事へて孝養を尽すといふことが現はれます。」(松岡秀明校訂、平凡社東洋文庫、1993年)、鈴木注「趨とは歩調をはやめて小またにあるくこと、庭とは家のはをいふ。孔子の子の孔鯉が趨而過庭。孔子より詩の教をうけしこと「論語」季氏篇に見ゆ、ここは父に省侍するをいふ。」。
- (22) 注(20)同様、本文に掲げた以外の杜詩注釈書については、『杜詩叢刊』を通覧したが、ここに掲げた以外の注釈書で『論語』を注するものは一例のみであった。
- (23) 吉川幸次郎『杜甫Ⅱ』「あとがき」(筑摩書房、1972年)「またおなじく営利出版ながら、久しくおぼろであった宋代資料の再現としては、前世紀末における「土工部草堂詩箋」の覆刻をあげねばならない。……嘉泰四年一二〇四と署するその自序に、近ごろは……お役に立ちたいなどというように、甚だしい俗書であるが、

俗書であるだけに、他の書には見えない特殊な説をまじえる。』。なお蔡夢弼の序には「國家祖宗肇造以來、設科取士、詞賦之餘、繼之以詩、詩之命題、主司多取是詩。惜乎。世本訛舛、訓釋紕繆、有識恨焉。……是集之行、俾得之者、手披目覽口誦心惟、不勞思索而昭然義見、更無纖毫凝滯、如親聆少陵之警歎而熟睹其眉宇、豈不快哉。」とある。

- (24) 清水茂『中国目録学』「中国目録学」六「刊本の時代」（筑摩書房、1991年）は、宋代に入って「需要量の多いものとして、官吏任用試験たる科挙の受験のために便利のように、参照語句を注した互註本や、大量の歴史書の簡約本である『五代史詳節』と『通鑑詳節』の出版も、営利出版が生んだ書物の形態といえよう。」とする。
- (25) ただし吉川氏は『九家注』を「いんちきな営利出版が盛行する中であって、それとはことなつた書を作るのが、編者郭知達の意図であつた。」とされ、『分門集注』『草堂詩箋』『千家註』などと一線を画している。また宋人の杜詩注を儒家の經典に対する漢魏人の「古注」になぞらえ、そのよさを「創始の注であるゆえにもつエネルギー」、「重厚さ」、「鋭敏さ」とし、「重厚さ」を「解釈を字句に密着させ、勝手なことをいわない」、「鋭敏さ」を「馬鹿力による思考」と説明したあと、「創始者のエネルギーは再検討し再評価されてよい。」と問題提起する。
- (26) 『万葉集』という名の双関語 日中詩学ノート』「古典詩歌の口語訳-『昭明文選訳注』のことなど-」（大修館書店、1995年）。
- (27) (唐)李匡父『資暇集』卷上「非五臣」の冒頭に次の通りある。「世人多謂李氏立意注文選、過爲迂繁、徒自騁學。且不解文意、遂相尚習五臣者、大誤也。所廣徵引、非李氏立意、蓋李氏不欲竊人之功、有舊注者、必逐每篇存之。仍題元注人之姓字或有迂闊乖謬、猶不削去之。苟舊注未備或興新意、必於舊注中稱臣善以分別。既存元注、例皆引據、李續之、雅宜殷勤也。代傳數本李氏文選。有初注成者、覆注者、有三注、四注者、當時旋被傳寫之。其絕筆之本、皆釋音訓義、注解甚多。余家幸而有焉。嘗將數本並校、不唯注之瞻略有異、至於科段、互相不同、無似余家之本該備也。因此而量五臣者、方悟所注盡從李氏注中出。開元中進表、反非斥李氏、無乃欺心歟。且李氏未詳處、將欲下筆、宜明引憑證、細而觀之、無非率爾。」
- (28) 五臣の言い分も聞いておくべきである。呂延祚「進五臣集註文選表」 「往有李善。時謂宿儒、推而傳之、成六十卷。忽發章句、是徵載籍述作之由。何嘗措翰。使復精覈注引、則陷於末學。質訪指趣、則歸然舊文。祇謂攬心、胡爲析理。臣懲其若是、志爲訓釋。」（四部叢刊本『六臣注文選』）。李善注が「釋事」に徹するあまり些末な學問に陥っていることへの批判である。
- (29) 注(15)『文選の研究』序章「『文選学』の歴史と課題」。岡村氏は丘光庭、蘇軾の批判を引いたあと「もつて『五臣注』が粗雑淺陋にして世俗に迎合する注釈であつた」（下線・川口）との見解を示す。また『李善注』が『六臣注』に圧倒されたことを「悪貨は良貨を駆逐する」と評する。
- なお丘光庭『兼明書』卷四・文選「五臣注文選」「五臣者、不知何許人也（五臣ちゅうのはどこの馬の骨や）。所注文選、頗謂乖疎。」。孔凡礼点校『蘇軾文集』（中華書局、1986年）卷六七・題跋「書謝瞻詩」「李善注文選、本末詳備、極可喜。所謂五臣者、眞俚儒之荒陋者也。而世以爲勝善亦謬矣。」、「書文選後」「五臣注文選、蓋荒陋愚儒也。」。
- (30) 全訳の代表的な試みが、注(26)松浦氏が話題とされる陰法魯『昭明文選訳注』（吉林文史出版社、1987年-1994年）や台湾商務印書館の今註今訳シリーズであろう。但し後者はWebで確認したところ2017年時点で集部書の訳注は出版されていない。
- (31) 以下、橋爪大三郎『はじめての構造主義』（講談社、1998年）に依拠した。
- (32) 『現代思想の冒険』（毎日新聞社、1987年）。
- (33) 漢代に五經博士が設置され、『易』『書』『詩』『禮』『春秋』が儒家の經典となり、『論語』『孝經』はそれに準ずる高い地位を与えられた（『鑑賞中国の古典2 論語』湯浅邦弘「総説Ⅱ」、角川書店、1987年）。唐代の開成石經にも九經に準ずるものとして『論語』『孝經』『爾雅』が刻された（『長安』礪波護「唐代長安の石刻」、角川書店、1996年）。
- (34) 順に、大修館書店、1959年。角川書店、1992年。上海辞書出版社、1986年。学習研究社、2006年。
- (35) 『文芸用語の基礎知識'85 四訂増補版』（至文堂、1985年）、テリー・イーグルトン『文学とは何か』（大橋洋一訳、岩波書店、1985年）、宇波彰『引用の想像力』（冬樹社、1991年）、石原千秋ほか『読むための理論』



(世織書房、1991年)、前田愛『増補文学テキスト入門』(筑摩書房、1993年)、宇波彰『記号論の思想』(講談社、1995年)、土田知則・神郡悦子・伊藤直哉『現代文学理論 テキスト・読み・世界』(新曜社、1996年)等に依拠している。以下、インターテクスチュアリティに係る研究のプライオリティはこれらの論著を含めた先行研究に存在する。

- (36) 山口県立大学グローバル人材育成支援言語学習プログラムチーム『+α-多言語プレゼンテーション-』(東洋図書出版、2015年、川口執筆分)。掲載にあたり一部修正をしている。また本論と図の用語が異なる場合があるが、考え方に相違はない。以下、本論における同様の図についてはこれを利用している。
- (37) 注(20)吉川『詩注』では、この詩で「宋以後、孔子の尊崇がたかまってからならば、そこを〔荒城〕ということ、はばかれたであろう」曲阜を「荒城」と表現し、杜甫の「醉時歌」に「孔丘も盗跖も俱に塵埃」とあることから「唐代における孔子の地位が、まださほどではなかった」とする。「聖人」孔子は後世に比べてずっと身近だったということであろう。杜甫が父を孔子に、自身を孔鯉に位置づける表現ができて背景はこの点からも説明できると思われる。また「唐代における経書の学は、より多く知性の学であり、宋以後の時代におけるような、道学臭に富んだ倫理道德の学には、まだなっていない。」とも述べる。
- (38) 注(20)吉川『詩注』に「この詩、「書経」「禹貢」を、重要な下じきとすること、注中で指摘するごとくである。儒家の古典である「書経」その他の「五経」は、唐代においても公務員試験の課目であり、その全文の暗誦を必要としたが、それを詩に反映させること、他の唐詩人にはむしろ稀である。いわゆる「経学」は、唐人の嗜好ではない。あるいは学問一般に唐人は冷淡であり、精力はもっぱら詩にむかった。ひとり杜はそうではない。……博学者としても当時の一流であり、学問の中心として、「経学」にも<sup>ふか</sup>達かったと見うける……」(下線・川口)とある。
- (39) この点については、注(35)土田ほか『現代文学理論』に特に依拠している。
- (40) 『戦艦ポチョムキン』と『アンタッチャブル』の関係についてはWebを検索すれば多くヒットする。ここの私説はそれらを全て閲覧したわけではないので同様の趣旨で既に述べられている可能性もある。その場合、プライオリティはもちろん先行論説に存在する。
- (41) 『巨塔』と『奴』の関係についても注(40)に同様である。

(中国文学)

## Views on Classical Allusion (Part 1)

Yoshiharu KAWAGUCHI  
(Chinese Literature)

### Abstract

Chinese classical literature has two typical rhetorical devices: *Duiju* 对句 and *Diangu* 典故, that is, classical allusion.

The purpose of this article is to describe several personal views on classical allusion in Chinese literature. This article is divided into two parts.

In the first section of Part 1, this paper considers aspects of commentaries of Chinese classical literary works in order to reveal the level of culture and education that the Chinese Literati (traditional intelligentsia) possessed. In the second section, this paper endeavors to elucidate the structure of classical allusion through the viewpoint of modern semiotics and intertextuality.